

二〇二五年度
晃華学園中学校

第二回
入学試験問題

【国語】

時間…四〇分
配点…八〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一 次の文章は、中学三年生の詩織（わたし）が、友人の千秋と、同級生の璃子の家に遊びに行った時の場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

璃子の家は閑静な住宅街にある立派な家だった。門柱にはお洒落な照明がのっけていて、夜になったら、これがやさしい灯をともしだるうと想像すると、うっとりとなる。道々、千秋が話してくれたことに、なるほどとうなずきもした。

「璃子の母さんさ、ケーキとか、焼き菓子とか、自分でつくっちゃうの。それがびっくりするほどうまくてさ、子どもごころに感動したわー。ここんちの子になりてえって、本気で思ったもん。詩織んちの母さんもつくったりする？」

「そんなの一度もないよ」

「だよな。ふつうないよな。璃子んちの母さんが特別なんだよな」

璃子とは小学校の三、四年が同じクラスだったとも教えてくれた。

門柱にあるインターフォンを押す。

「あー、すいませーん」

セールスマンみたいな千秋の口ぶりに笑いそうになる。

わたしたちの姿がカメラでわかったのか、目の前のインターフォンから璃子の声が聞こえた。

「そのまま門を開けて入ってきて。いま玄関開けるから」

通されたりビングは広くて、きれいで、小さな男の子が絨毯の上で積み木遊びをしていた。なにをつくっているのかはわからなかったけれど、小さな子がつくったとは思えないほど大きかった。

「ゆう、お姉ちゃんの友だちが遊びに来てくれたよ」

璃子が男の子に話しかける。

「こんにちはー、きれいなお姉さんが来たよー」

近づいたのは千秋だ。

ゆうくんは、あつあつと笑いながら、手でたたくようにして積み木を崩し、絨毯の上に廃墟をつくった。

「これはなんだ？ 空飛ぶイカだー」

千秋は、廃墟のなかから三角の積み木を拾い上げて飛行機のように飛ばし、その飛行機をつかもうと、ゆうくんが手を伸ばす。千秋はだれとでもすぐに仲よくなる才能をもっているが、^①こんな小さな子まで守備範囲はんいだったとは。

「ここにポットとお菓子を置いておくから。璃子、そっちは危ないからこっちでね」

璃子のお母さんがダイニングテーブルにお茶の用意をしてくれていた。素敵すてきなおとなの女性とはこういうひとのことを言うのかな。やわらかいブラウスが似合っていて、わたしの母とはずいぶん違ちがった。

「おじゃましています」

わたしたちは、ゆうくんを囲むようにすわっていたから、すわったままで頭をさげた。もつとちゃんと挨拶あいさつをしたほうがいいだろうかとも思ったけれど、

「ママ、もういいから。だいじょうぶだから」

と、璃子がお母さんを追い出すようにし、わたしたちに向かって、にっと笑った。^②なんとなく不敵えな笑み。

わたしたちはおしゃべりを始めた。

ゆうくんは千秋のひざにすわって、三角の積み木を動かしている。空を飛ばしているつもりなんだろう。

「ゆう、すっかり千秋になついちちゃったね」

璃子がうれしそうに言う。

「この子を見る目があるよ。だれがいちばんきれいか、わかってる。ねえ、わかってるよねえ」

千秋がゆうくんのほっぺをつつき、ゆうくんがくふつと笑う。

「あのね、本当のことを言っていないだよ」

わたしはふたりに聞こえるように、ゆうくんにささやいた。

「この子、いくつだっけ」

千秋がきく。

「二歳さい。もうすぐ三歳になるけど」

「ふうん、二歳か」

千秋の手がゆうくんの頭をなでる。

わたしは、こんな小さな子にどうやって接したらいいのかわからなくて、千秋の隣でただ見ているだけだった。

そのうちゆうくんは千秋のひざからおり、璃子に向かって手を伸ばした。ああっ、うううっ、とさかに話しかける。璃子には、こ
とばにならないそのことばがわかるのか、抱っこなの、とゆうくんを引き寄せ、お尻に手をあてがって、わたしたちのほうを向くよう
にひざに乗せた。うまいものだ。ゆうくんは、うううっ、あっあー、手を伸ばしたりにぎつたり、ご機嫌だった。

わたしたちは、わたしたちのおしゃべりをした。けど、そうしながらも、わたしはゆうくんを観察した。ひとりで、さっきの積み木
をつくったのだとしたら、すごいと思う。その一方で、もうすぐ三歳なら、もつことばを話すような気がした。どのくらい話すかは
わからないけれど、うううっ、あっあー、だけじゃない気がする。弟はすこし変わってるかも、と璃子が言ったのはこのことだろうか。
ゆうくんと目が合ったから、笑いかけてみた。

うそっ。わたしのほうに来ようとする。どうしよう。ほんとうに来た。両手をわたしに向けて差し出すから、脇の下に手を入れて抱
き、璃子をまねてくるっどひざの上に乗せた。あ、いいかも。この重さ、いいかも。重すぎることはなく、でも生きものを感じさせる
重量感があった。ゆうくんのお尻からわたしの腿に、ほかほかとした体温が伝わってくる。わたしよりすこしだけ高い体温。ああ、小
さい子って、こんな感じなんだ。ゆうくんがのけぞると、頭がわたしのあごを押す。でも、それもかわいい。髪の毛なんか、さらさらだ。
ぐふふ、ぐふー、あー、うー、ぐふー、意味のわからないことばをつぶやくゆうくんの足にふれながら、おしゃべりを続けた。

ゆうくんが立ち上がろうとしたから、立ち上がらせた。

「いたたたた」

髪の毛をつかまれた。こめかみのあたりの毛を、ぎゅつとにぎつて離さない。

「ゆう、そんなことしちゃ駄目」

璃子が言う。

「ゆう、駄目だつてば。遊んでもらえなくなるよ」

璃子の声はのんびりしているようにしか聞こえない。

ああ、いつもの三つ編みにしてくればよかった。

「まいった、こーさーん」

おどけて言ってみた。でもゆうくんは、ますます強く引つ張る。ぐふー、ぐふふ、ぐふー。半端じゃなく痛い。

「お願い、この子なんとかして」

③ 璃子に訴^うえると、璃子の目がすうつと冷たくなった。

なぜそんな目でわたしを見るの？

「ゆうくん、あたしと遊ぼう」

横から千秋がゆうくんを抱き取り、髪の毛が持つていかれた。

「いたたたっ」

「おお、ほんとだ。詩織、何本か抜^ぬかれたよ」

ゆうくんの手には、わたしの髪の毛があった。

「ごめん、詩織。でも、ゆうには悪気ないから」

璃子があやまる。

「うん、平気、平気」

でも怖^{こわ}かった。

すぐに千秋も髪の毛を引つ張られた。

「んなことすると、こうしちゃうぞ」

千秋はゆうくんをくすぐった。くすぐられたゆうくんは髪の毛から手を離し、からだをよじつて、またつかもうとする。千秋はショートヘアだから、ゆうくんはつかみにくそうで、それでもなんとかんだ髪の毛を離すまいとする。まるで小さな

A

だ。

ゆうくんをくすぐる千秋の手がとまった。

なにが起こったのか、すぐにはわからなかった。ゆうくんが千秋にひそひそ話をしているように見えたのだ。でも違った。頬^ほにかぶりついていた。

「璃子、たいへん」

璃子がゆうくんを千秋から引き離そうとしたけれど、ゆうくんは千秋の髪の毛をにぎり、頬にかぶりついたままだった。

「なにもしないで」

千秋が鋭^すく言う。

わたしはリビングのドアを開け、大きな声で呼んだ。

「おばさーん」

千秋の頬には赤い齒形が残っただけで血は出ていなかった。璃子のお母さんは氷水で冷やしたタオルを千秋の頬にあて、家の電話番号をたずねた。

「おうちのかたに、おわびしなければ」

「このくらい平気です。もう痛くないし。あたしこそ、ゆうくんのいやがることをやっちゃったと思います。すいません」
千秋は頑として自分の家の電話番号を教えなかった。

「もし、なにかあったら、かならず言ってちょうだい。痛くなったり、熱をもつようだったり、なにかあったら、かならず」
なにごともしなかったように積み木で遊ぶゆうくんを、璃子のお母さんはとても疲れたような目で見た。そして、ゆうくんを抱き上げると、リビングから出ていった。うぐぐ、ああつと、むずかるような声が廊下の奥から聞こえる。

「ごめんね、千秋」

璃子の目が真っ赤だった。

「あたしは平気だって。④んなことより璃子、だいじょうぶ？ きついんじゃない？」
そのひとことで、璃子の目から涙が落ちた。

そして涙にぬれた顔をあげると、わたしに向かって言ったのだ。

⑤「詩織がゆうをあんな目で見ただからだよ。だから、こうなったんだよ。わかってる？」
ゆうくんを見ていたことを見られていたことに、どきりとした。

でも、わたしのせい？
なぜ？

なぜ、そんなことを言われなきゃならないのか、わからない。ひどくないか。

「詩織のせいじゃないって。あたしのせい。あたしが調子こいて凶に乗ったんだ。ごめん」
千秋があやまったけれど、もちろん千秋のせいでもない。

家の奥から聞こえるゆうくんの泣き声がひとときわ大きくなり、わたしたちはいたたまれず、璃子の家を出た。

(中略)

その週の土曜日、わたしと千秋はふたたび璃子の家を訪ねた。

リビングに入ると、璃子のお母さんに迎えられた。

「どう？ もう痛くない？」

璃子のお母さんが真っ先にしたことは千秋の頬を確認することだった。

「はい、もうすっかり」

千秋は指で頬をつついた。

「よかった。ご両親はなんて？ 心配されたでしょう？」

「ぜんぜん」

「そんなこと言って」

「うち、下に三人いて、小さな傷はしょっちゅうだから、気にしている余裕なんか無いっつうか、唾つけときゃ治るって感じで」

千秋はでへへという顔をし、お母さんもつられたように笑みを浮かべた。

ゆうくんは、このままと同じように積み木でなにかをつくっている。

「おっきなの、つくってるなあ」

千秋がゆうくんに近づく。

璃子も璃子のお母さんも、はっとしたのがわかった。

⑥ わたしは身をかがめるようにして、千秋より早くゆうくんに近づいた。

「なにつくってるの？」

髪は三つ編みにして後ろに垂らしてある。たとえ引つ張られても、だいじょうぶ。

うううっ、あっああ。ゆうくんは、ことばにならないことばを発し、積み木をひとつとって、わたしにくれた。

これ、どうしたらいいんだろう。

「先にこっちで、お茶をどうぞ」

璃子のお母さんが I ように言ってくれたから、わたしは積み木をそこに置いて、ゆうくんに伝えた。

「あとでね」

(中略)

「ママ、疲れたんじゃない？ すこし休んだら」

「そうね、そうしたほうがいいかもしれない。でも、ゆうはママがみなきやね」

璃子のお母さんはゆうくんに近づき、抱き上げようとしたが、ゆうくんは身をよじってぐずった。うううううう。わたしにもわかった。いやだと言っているんだ。

「ママ、ゆうはわたしがみるからいいよ」

「そうはいかないわ」

璃子のお母さんが、いやがるゆうくんを無理に抱き上げたときだ。ぎいあああああつ。子どもの甲かんだか高い声がりびングをいっぱいにした。耳をふさぎたくなるような声だ。その声に負けられないように璃子が声を張った。

「ママ、ゆうはここにいたいんだよ。積み木がしたいんだよ。わかんないの？ だいじょうぶだって、わたしがちゃんとみるから」
璃子のお母さんは目をぎゅつとつぶって、ゆうくんを絨毯の上に置いた。

「じゃあ、お願い」

凄まじい泣き声をあげたゆうくんだったが、自分の願いがなかったのがわかったのか、あきれれるほどあっさりと泣きやんだ。そしてわたしのところに、とことこやってくると、積み木を、わたしの手のひらにのせた。

なにを要求されたのか、すぐにはわからなかった。

うううう。

思い出した。ケーキを食べるまえに約束したんだった。あとでね、と。あのひとことを憶おぼえていたのか。

「どこにしようかな、どこがいいかな」

ゆうくんがつくっているのは塔とのように見えたから、塔の上にレンガをひとつ積み重ねるみたいに置いた。

ぐふ、ぐふふう。

ゆうくんが、わたしを見上げ、うれしそうに笑った。
よかった。

二個目の積み木を渡されたらどうしようと思ったけれど、それはなく、ゆうくんはひとり遊びに戻っていった。
小さな子と遊んだことなどなかったから、こんなものなのかどうかはわからなかったけれど、ふしぎな感覚が残った。ゆうくんを小さな子どもとは感じなかったのだ。ひとりの人間とやりとりをした感覚があった。

璃子に小声で伝えた。

「ゆうくん、ことばをわかってるね」

「なんでそう思うの？」

「わたしが、あとでね、と言ったの、憶えていた」

璃子がじっとわたしを見る。

「ほんとうに、ゆうが、ことばをわかっていると思う？」

「うん、思う」

ゆうくんとのやりとりを詳しく教えた。

璃子の顔に、なんとも言えない表情が浮かんだ。まだサンタクロースの存在を信じていたころ、枕もとにプレゼントがあることに気づいたときのような、驚きとうれしさがなまぜになった顔。⑦ 璃子がこんなに無防備な顔をわたしに見せてくれたのは、初めてかもしれない。

「ふたりとも、なにひそひそやってんの。早くネットフリックス観ようよ」

千秋がせっついてくる。

「はいはい、わかった。これ抱いて」

璃子がソファからクッションをとってわたしたちにくれたから、わたしたちはそれをお腹に抱いてテレビの前にべたりとすわった。なにを観るかで大いに悩み、結局、映画館で観ようとしていたヒーローものの作品の前作を観ることにした。そうすれば、映画館で新作を観るとき、いつそう楽しめると。

ゆうくんがぐずると、映画をとめて璃子が相手をし、ゆうくんが璃子ではなく千秋やわたしを求めれば、わたしたちが相手をした。

髪を三つ編みにしていたせいか、髪のを引つ張られることはなく、ぐずりそうになると、すぐに璃子が抱き取ってあやしてくれた。そしてゆうくんが積み木遊びに戻れば、わたしたちも映画の続きに戻る。そんなことを二度ほど繰り返すうち、ゆうくんは千秋のひざで眠り始め、璃子がタオルケットをかけてやった。

そうやって、わたしたちは最後まで映画を観た。

ゆうくんはまだ眠っている。

「寝ているときは [B] なんだけどね」

璃子が寝顔をのぞき込む。

「うん、 [B] だな」

なつかれている千秋は、うれしそうだ。

「でも、泣いたら最悪だよ。ゆうの声、聞いたでしょ。あれが始まっちゃう」

璃子が顔を思い切りしかめる。

確かに、あの声に慣れることはできないだろう。

こんなにかわいいんだけどね。

その日、璃子のお母さんが出てくることはなかった。

璃子とわたしの関係が変わった。

親しくなったのだ。

(森埜こみち 『彼女たちのバックヤード』)

問一 ——線部①「こんなく守備範囲だったとは」とありますが、この時の「わたし」の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 千秋はだれからも嫌われることのないように、どんなときも明るくふるまおうとしているので気の毒に思った

イ 千秋が璃子と仲よくなるために、弟の「ゆうくん」を手なづけようと努力しているようで嫌気がさした

ウ 千秋が散らばった積み木で「ゆうくん」がけがをしないように、その場から遠ざけているのに感心した
エ 千秋はもともたれとでも仲よしになれるが、小さな男の子の気を引くこともできるのに驚いた

問二 ——線部②「なんとなく笑み」とありますが、この時の「璃子」は「わたし」にはどのように見えたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 実をいうと詩織のことが気に入らない璃子は、親がいなくて詩織を困らせてやろうとしている
イ うつとしい母親を遠ざけ、自分たちだけでゆつくりおしゃべりがしたくてわくわくしている
ウ 母親を追い出すことで、自分のほうが母親よりも強い立場にあることを示せて優越感にひたっている
エ 「ゆうくん」といっしょに過ごすことで、自分の大変さを一人に分かつてもらえるかどうか気にしている

問三 ——線部③「璃子に冷たくなった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 詩織はそもそも子どもが苦手なのに、じつと見つめたり笑いかけたりして「ゆうくん」を誘ったから
イ 「ゆうくん」がいろいろと話しかけているのに、詩織は無視をしておしゃべりを続けていたから

ウ 詩織が「ゆうくん」を負えない子どもだとあきらめ、相手をするのをいやがっているのがわかったから

エ 詩織が髪型を三つ編みにしなかったことが原因なのに、まるで「ゆうくん」の方が悪いような口ぶりだったから

問四

A

と

B

 (二か所あります)に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア A 狼 おおかみ B きつね イ A 怪獣 かいじゅう B 天使
ウ A ヒーロー B ぬいぐるみ エ A 悪魔 あくま B 神様

問五 ——線部④「んなことよりきついんじゃないかね?」とありますが、なぜ「千秋」はそう言ったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 機嫌が悪くなると手が付けられなくなる「ゆうくん」の世話で、璃子が大変そうだったから
イ 自分にけがをさせた「ゆうくん」の代わりに責任を感じている璃子が気の毒だったから
ウ 詩織に「ゆうくん」を変な目で見られて傷つけられた璃子がかわいそうだったから
エ 友達を家に呼ぶと「ゆうくん」にじゃまをされて、友達が璃子から離れていくと思ったから

問六 ——線部⑤「詩織がく見たからだよ」とありますが、「詩織」は「ゆうくん」をどのように見ていたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分よりも「きれい」ではない千秋の方になつた「ゆうくん」に失望し、がっかりしていた

イ 小さな子どもに対してどのように接していいか分からず、笑顔でごまかそうとしていた

ウ 大きな積み木を作ったのならすごいとは思いますが、年齢ねんれいの割にことばを話せないようだと思察していた

エ しょせんは小さな子どもに何を言っても分かるはずがないと、「ゆうくん」をみくびっていた

問七 ——線部⑥「わたしはく近づいた」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 璃子の母親にこれ以上心配をかけないように、今回は千秋の代わりに自分ががんばると決めていたから

イ 千秋が再び「ゆうくん」にかみつかれないように、自分が代わりに相手をしようと思つたから

ウ 千秋が、前回かみつかれた仕返しをしようと思つて「ゆうくん」に近づこうとしたのが分かつたから

エ 璃子に前回責められた反省から、千秋のように小さな子どもと気軽に接するように心がけたから

問八 I にはどのような言葉が入りますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 水に流す イ 角が立つ ウ 横車を押す エ 助け舟がねを出す

問九 ——線部⑦「璃子がく見せてくれた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」も「ゆうくん」がことばを理解していると気づいてくれたから

イ 「わたし」が自分の家族のことをばかにしていないことを知り、ほっとしたから

ウ 「わたし」が人間どうしにはことばなどいらないと考えていることに共感したから

エ 「わたし」も「ゆうくん」と人間らしいやりとりができるほど成長したのがわかつたから

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文中の「表」は省略します。

○ 食べものから、売って儲ける「商品」へ

「小麦という一つの作物が、ロシアとウクライナという二つの国から、輸出が滞るかもしれないということ、^① 世界が「食料危機」に陥ると騒がれました。

リスク分散が大事だと、聞いたことがあると思います。英語を話す人たちは「ア 入れるな」とも言います。『ドン・キホーテ』が書かれた時代からの教訓だとか。つまり、一つの籠にすべての卵を入れてしまうと、その籠を落としたとき全部の卵が割れてしまう。だから、卵は少しずつ複数の籠に入れておくべき。そうすれば、一つの籠を落としても、残りの卵は無事に残るからとのこと。

私たちが生きる世界には39万種もの植物が確認されており、そのうち5000～7000種類の植物を人間は食して生きてきたそうです。とにかく食べられるモノを食べて生き延びないと、人類はもっと早くに死に絶えていたでしょう。それなのに現在では、小麦、コメ、トウモロコシという、たった3種類の作物が、世界人口のカロリー摂取の半分以上を占めているそうです。だからこそ小麦も「世界の主食」といわれるのでしよう。

でも、5000～7000種類もの食べられる植物が存在するのに、そのうちたった3種類の作物に世界人口の半分ほどが頼るといえるのは、リスクを集中させてしまっていないませんか。

しかも、表1にあるように、その小麦の半分近くを、中国、欧州連合、インドの3カ国／地域が生産し、欧州連合とロシアが半分近くを輸出しています。トウモロコシは、米国が3割、中国が2割強と2カ国で世界の半分以上を生産しています。これらの地域で、干ばつや洪水や山火事などの天災が起こると（異常気象が多発している現在ではよくある話）、もしくは戦争や、政権の交代や、何らかの理由で輸出が止められると、たちまち世界が食べられなくなるリスクがある。

これほど、限られた地域で生産されている、限られた作物に、世界80億の人口が依存するのは、リスクを集中しすぎではないでしょうか？ リスク満載な現代社会ではとくに。

② その集中は、資本主義経済的には都合が良かったからと考えられます。

もともと人類は、世界各地の、いろんな気候の、山や海や森や川などいろんな自然環境の中で、その地域で食べられる多種多様な植

物を食べて生き延びていました。そもそも、陸路でも海路でも物を運ぶことに時間も労力も費用もかかった時代に、しかも大多数の人們が身の回りの自然や田畑から食料を入手できた時代に、庶民が日常的に食べるものを遠くまで売りに行くとは思わないでしょう。小麦の貿易がなかったわけではありません。フェルナン・ブローデルというフランスの歴史学者が記した『地中海』シリーズにも、小麦の貿易があった様子が描かれています。でも、食料らしい貿易の記述といえ、地中海沿岸の裕福な都市部へ持ち込むための、小麦、ぶどう酒、オリーブ油くらいでした（このオリーブ油は食用以外に使われたものだと、私はいらんでいます）。食料は基本的に都市周辺や近郊の農村から調達するものであり、ただ大都市の金持ちだけが、重く嵩張る食料を長距離移動させるといって、③贅沢をするこゝとができたのでした。逆に、当時の主な貿易品として描かれていたのは、アフリカやアメリカ大陸から輸入された金銀などの貴金属や、レヴァントと呼ばれたアジア大陸からの「東方貿易」で、とくに、東方貿易の目玉商品として胡椒など香辛料がありました。香辛料は、軽量、小型、かつ、当時は高価だったのです。

都市部では、他の地域から輸送してきた小麦を食べていたかもしれないけれど、でも、西洋でも昔から小麦が大多数の人たちが毎日のように食べる「主食」だったわけではなかったようです。ブローデルの研究でも、トルコの村人はオート麦（燕麦）のパンを食べていたし、コルシカでは粟のパン、イタリア半島ではコメ、アフリカ北部ではエジプト豆や空豆など、いろんなモノが食べられていました。小麦が主食だと思われている欧州でも、例えば英国に小麦パンが普及したのは産業革命が始まったところで、1770～1870年代が「小麦パンの時代」と呼ばれたほど、近代に入ってから急に広まったのでした。その後でも、北のスコットランドでは燕麦のオートミールが多く、西のウェールズでは大麦やライ麦の消費が多かったそうです。

「近代に入ってから」とほのめかしたように、④小麦が「主食」になった経緯にも、資本主義経済の始まりが関係しています。

世界に先駆けて産業革命を始めた英国では、農村から多くの労働者が都市部の工場に集まってきました。それまで農村で、田畑や山川など身近な自然環境から日々の食を得ていた人々も、工場で働くために町に移住すると、自分の食べものを自給することができません。つまり、a というまとまった食料の市場ができた。するとそこへ、まとまった食料を供給するシステムが生まれます。

英国は、まずは今のドイツやポーランドなどバルト海沿岸地域から小麦を輸入し始め、やがて大西洋を越えて今の米国やカナダなどから小麦を輸入するようになりました。すると輸出する側の北米では、売るために小麦を栽培する農家や、その小麦を集荷して輸出する穀物商社が生まれてきます。こうして小麦は貿易する「商品」となり、売るための商品作物を生産する農業や、商社などの流通業が発展していきました。食べものの「商品化」です。（中略）

○小麦を大量生産・大量消費するとは

序章で、家庭菜園ではいろんな作物を少量ずつ家族の胃袋を満たす分だけ栽培するけれど、売るときの商品作物は I ことを話しました。小麦も同じです。売るときの小麦を栽培したら、集荷したり、売るときの品質管理したり、輸出したりするためには、小麦の種類や品質が均一な方が都合が良い。当時は現在のように生産から販売までの情報を細かく追いかけるトレーサビリティの仕組みも情報技術もなかったもので、とくに遠方と取り引きするためには、海に向こうの業者に「小麦1トン」と注文するためには、供給される小麦は揃っている方が都合が良かったでしょう。

加えて、小麦を挽いて粉にする製粉の段階でも変化が起きました。近代以前は、自分で栽培したいろんな麦類を、自宅の石臼を使って挽くか、近くの風車や水車を使った石臼で挽いて粉にし、それらをじっくり発酵させて、自宅か村の石窯で焼いたパンを食べる。もしくは粉にしないままオートミールのように煮てお粥のようにして食べていました。小麦などは製粉すると胚芽が破壊されて酸化しやすくなるため日持ちしなくなります。だから、II という制約がありました。

ところが近代に入ると、この製粉過程も機械化されました。17世紀ころからしだいに、蒸気機関を動力とする鉄製のロール式製粉機が広まりました。エンジンで稼働するので、大量の小麦を製粉できます。しかも臼ではなく、鉄製の対となったロールを回転させそのかみ合い部分に小麦を通過させるので、短時間で多くの小麦を挽くことができます。

工場で動力と機械を使って小麦を製粉するようになると、大量の原料、つまり大量の小麦が必要になります。とくに、北米の大草原で栽培しやすかった硬質の春蒔き小麦がこの鉄製のロール式製粉機に適していたため、北米において商品作物としての小麦を大量生産するようになりました。つまり、農業が近代化・大規模化され、小麦を特産する地域が形成されていったのです。しかも機械で真っ白になるまで製粉した小麦粉は、胚芽などの油分が取り除かれて酸化しにくかったため、長期間保存して遠くまで輸送できるようになりました。つまり、遠くまで市場を広げたり、海外まで輸出したりしやすくなったのです。すると、小麦粉を使ってパンなどを作る食品製造業も、広範囲から大量の原料を調達して、ここでも機械を使って大規模化し、大量のパンや加工食品を生産できるようになった。するとそれら大量の加工食品を大量に販売する流通業や小売業も発展していく。

つまり、製粉業が機械化・大規模化すると、農業側に単作の大規模生産を求め、出荷先に大手パン工場など大量販売先を求めようになるのです。

アルフレッド・チャンドラーという米国の経営史家が記したように、当時は、鉄道網と電信網が急ピッチで建設され、この輸送と情

報シシステムの構築によつて、多くの産業が大量生産と大量流通を急成長させた時代でした。企業には優れた経営陣も育ち、例えば製粉業では、粉砕機や鋼製ローラー、精製機、吸引機などを連続稼働できる大規模な製粉工場を設立・運営して、商品としての小麦粉の検査や等級づけなど品質管理も整備することで、高品質の小麦粉を安い単価で大量生産できるようになりました。

商品を大量に生産すると、それを大量に販売する必要が出てきます。だから、市場で売れそうな商品を開発して、市場を広げる努力をして、なるべく原料などの費用は抑えて、なるべく高く大量に売ろうとする。つまり、大量生産・大量消費の始まりでした。

こうして、食と農の世界も、産業としての農業、食品製造業、流通・小売業がとらなる、資本主義的食料システムとして発展し始めました。他の産業と同じロジックで、^⑤競争しながら利潤を追求する、企業や事業者として「食べられる商品＝食品」を、なるべく安く生産してなるべく高く大量に売りたい、そんな食料供給システムが変わっていったのです。

(平賀緑『食べものから学ぶ現代社会——私たちを動かす資本主義のカラクリ』)

問一——線部①「世界がく陥る」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ロシアには人口が集中しているだけでなく、ウクライナとの長引く戦争で多くの食料が必要になったから

イ 小麦は限られた地域から輸出されており、ロシア、ウクライナはその地域の中に含まれているから

ウ 小麦の売価を上げるために、ロシア、ウクライナによる意図的な生産調整がおこなわれたから

エ ロシアとウクライナは世界的な気候変動により大きな影響を受け、小麦の生産量が激減したから

問二 アに当てはまると考えられる言葉を十五字以内で書きなさい。ただし、「卵」、「籠」という言葉を必ず用いること。

問三——線部②「その集中はく都合が良かった」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 食料の種類や品質が均一となることで、集荷や管理が容易となり、利益が上がるから

イ 地域、作物の集中には様々なリスクがあるため価格の変動が激しく、多くの利潤が期待できるから

ウ 生産や輸送のコストを下げることで、多様な食物を提供することができるようになるから

エ 都市部の工場に労働者を集めるための食料が、安定して供給できるようになるから

問四 — 線部③「贅沢」とありますが、なぜ「贅沢」だといえるのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 保存や加工に費用がかかるものが含まれているから
- イ 生きるのに必ずしも必要なものではないから
- ウ 他の人より多種多様なものを食べることができから
- エ 近隣にないものは輸送費が上乗せされて高価になるから

問五 — 線部④「小麦がく経緯」とありますが、この「経緯」はどのようなものですか。次のア～エを順番に並べて、記号で答えなさい。

- ア 小麦の製粉技術向上によって小麦粉の品質が改良され、長距離の輸送が可能となった
- イ 外国から多くの小麦が輸入され、輸出側の農家の大量生産が始まった
- ウ 小麦粉を使った加工食品の大量生産が可能となり、それを販売する流通業、小売業が発展した
- エ 産業革命により農村から都市部へ人が移住したことに伴い、多くの食料が必要になった

問六 a に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 庶民の贅沢品 イ 工場主の台所 ウ 労働者の胃袋 エ 農村の特産品

問七 I、II に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- I
 - ア 多くの種類の作物を大量に栽培するようになる
 - イ 限られた場所で、できるだけ多くの作物を栽培する工夫をする
 - ウ 1く数種類の作物を大量に栽培するようになる
 - エ 様々な場所で、それぞれの気候にあった作物を栽培する

- II
 - ア 自分で栽培したものは自分で食べなくてはいけない
 - イ なるべく近くで早く食べるべき
 - ウ 小麦は製粉せずに食べなくてはいけない
 - エ その日のうちにパンに加工するべき

問八 ——線部⑤「競争しながら追求する」とありますが、これに当てはまるものはどれですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 単価が高くなっても、できるだけ高品質の商品を作り出そうとする
- イ 消費者のニーズに合わせた商品を大量に生産し、原価を下げようとする
- ウ 特定の購買層にむけた商品を扱い、安定的な売り上げの確保を目指す
- エ 高額な商品を扱うことで企業イメージを上げ、利益の拡大をねらう

三 次の①～③の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ①生活にシショウが出る
- ②カイキヨを成しとげる
- ③彼女は金メダルを取り、キシヨクマンメンだった

